

日韓市民ネットワーク・なごや

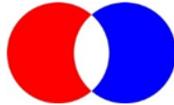
会報 No. 79
2017-1-4

한일 시민 네트워크 · 나고야

Home Page : <http://home.m00.itscom.net/nikkan/index.html>

発行者：後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



紺青

目次

- 1 事務局通信
- 2 ニュース
- 3 渡来陶工の里紀行
- 4 お知らせ

統括幹事：後藤和晃
事務局
会員の皆様の感想
事務局



事務局通信

사무국 통신

統括幹事 後藤和晃

1. 第20回記念交流会に是非ご参加を！ ～創立20周年目の船出です～

2017年2月26日(日)の午後、私たちは下記により第20回となる記念総会と、記念交流会を開きます。私たちの会が発足したのは1998年2月でした。

会創立のあの日から、すでに19年の歳月が過ぎて行き、私たちは奇蹟のように20周年目という節目の年を迎えています。創立の時代を支えて頂いた日韓双方の方々の中で、惜しくも逝去された人は20指にのぼるでしょう。2月26日には、新たに入会されたメンバーも含め民団関係者、ニューカマーの人々、留学生、日本人学生などと共に、多勢、顔を合わせたいと思います。

そして、日韓の空に暗雲が流れている下でも、民間交流の明りを灯し続ける決意を確かめあいたいと思います。当日のスケジュール等は次の通りです。

第20回 総会・交流会

★実施日 平成29年2月26日(日)

★場所 名古屋韓国学校

*名古屋地下鉄「東山線」亀島駅2番出口から北西2分

【総会】 午後3時から2階教室

- 2016年度 事業や会計結果の報告
- 2017年度 事業の提案
- 2017年度 役員体制の確認

【交流会】 午後5時30分から2階教室

お寿司・トック・チヂミ・から揚げ・キムチなど

多彩な食べ物、ビール、焼酎、ワイン、マッコリなどの他
ノンアルコール、ジュース、お茶各種なども用意します。

是非、参加してください！

꼭 참가하세요



- ◆会員や協力者の皆さん方には参加費の振り込み用紙を同封させていただきます。
- ◆当日、受付での混乱を避けるため、2月15日ごろまでに郵便局から振込んで頂くようお願いします。

【 会 費 】	成人	3,000円
	学生（高校・大学）	1,500円
	留学生	無 料



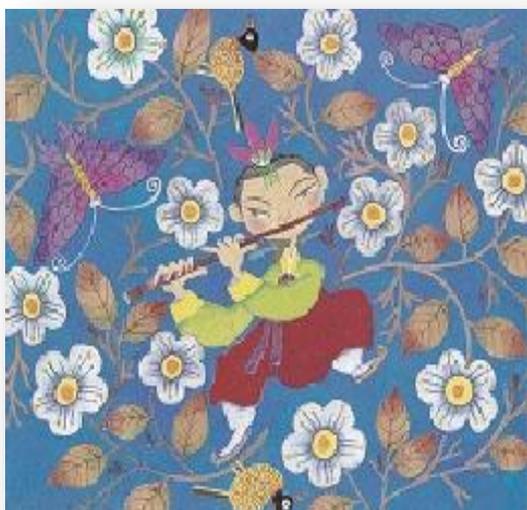
2月26日に対する事務局一同の気持ちを、もう少し述べさせていただきます。
これまで19年間の団体活動を通し、私たちが体得できたのは次のような事柄でした。

- ① 日本人市民、在日、ニューカマー、韓国各地の市民団体など、それぞれの間では戦後70年過ぎた現在になっても、強固といえるネットワークが殆ど構築できていないこと
- ② 日韓親善協会という組織がある以外は、政治的、宗教的な背景なしに在日グループと交流している民間団体が殆ど無いという事。
- ③ 韓国の市民・学生と親密な交流を継続している民間団体は、日本では極めて少ないこと。

以上のような分析に基づき、私たちの団体は、構成員も少なく資金力もない中で、精一杯、在日の人たちとも、留学生とも、そして韓国各地の民間団体や大学とも交流の努力を続けてきました。そして、来る2017年度については、ヘイトスピーチの横行という最近の状況を踏まえ、在日やニューカマーの人たちとの連携を、これまで以上に重視して行きたいと考えています。

在日の人たちは、来日いらい既に3代、4代中には5代まで年輪を重ねてきたという人たちです。一部の例外はあっても、殆どの人たちが日本で生活し続ける覚悟で暮らしておられることでしょう。ニューカマーの方々にしても、日本に来て10年、20年が経過、子供たちも大きくなり、しっかりした地歩を築いた人々が少なくありません。

私たちは、今年2017年に、在日やニューカマーの人々との絆を少しでも強く太くしてゆけるように、行動できればと考えています。2月26日には、日韓両国の会員や協力者、民団の関係者、留学生、日本人学生など多彩な人たちに集まってもらい、新しい時代への一步を踏み出したいと考えます。皆さん方のご参加を心から要請します。



池貴巳子さんの絵画

2. 歩いた！対話した！乾杯した！

～2016年・秋・交流の森～

10月29日（土）晴天の下、犬山市の八曾自然林で例年通り日韓交流の森の行事を展開しました。この日、八曾に集結した人数は45人。日本人、在日、ニューカマー、そして留学生など多彩で『交流の森』というのに相応しい顔ぶれでした。

一行のうち足の自信のある人々は、まず、キャンプ地から八曾の滝まで往復8キロのウォーキングに挑戦しました。その中には、日韓ひとりずつの小学生がいましたが、彼ら2人も含めて全員無事に歩き切りました。

一息ついた所で集会に移り、互いの身元を紹介しあった後は、全員で乾杯、いも煮と焼肉を味わいながら交流の花を咲かせました。

この交流の森に初めて参加した人達を、少し紹介しておきましょう。その筆頭は、一宮市の民団の支団長である石春浩さん親子です。



八曾の滝

石さんは、一宮で金型研磨の仕事をしている人ですが、来日してすでに40年といます。明るく、気さくな人柄で焼肉やいも煮のサービスなど積極的に手伝って頂きました。

同じく在日で、例年交流の森行事を支援して頂いている、鄭禧昇さんご夫妻は、今年、次男の昌鎬(まさたか)さんを同行されました。昌鎬さんは、若手の日本人や留学生たちと積極的に対話し、和やかな雰囲気造りに大いに貢献してもらいました。

また、李尚勲さんの連れのニューカマーの康英熙ご夫妻は、美味しいチヂミを2時間近く焼き続け、参加者一同から大感謝されて



いました。

一方、日本人の側では、事務局の大嶋明氏の友人という名古屋ユネスコ協会の会長の下枝洋さんが参加され、広くアジアの人たちと交流してきたキャリアを生かして、在日やニューカマーの人たちと熱心に対話して頂きました。

その他、例年の通り八曾の集いの料理長を引き受けてもらった春日井の中川修介氏や、いも煮や焼肉のサービスを献身的に勤めて頂いた名大生、鈴木健介君のご両親、鈴木峰雄さんと靖乃さんには、心からの御礼を申し上げます。本当に有難うございました。



上述の協力者（料理長）の中川修介氏は、会が発足する前から「日韓人の交流、対話というからには、日韓双方からそれぞれの年代に合う人たちが出てこなければダメだ。年齢差があり過ぎる人たちに対話しろと言っても難しいからさ！」とっていました。

会が発足して19年目を迎えた今年の交流の森は、中川氏の理想に、かなり近づいてきたのではないかと感じています。

この日の集いは、最後にアランを合唱し「年が明けて2月になったら、第20回総会や、そのあとの交流会で顔を合わせましょう！」と語り合って終わりました。

3. 『渡来陶工の里』九州縦断紀行を終えて

11月23日から4日間、当会の姉妹グループ日韓交流史フォーラムの30人は、九州縦断紀行を行いました。

この旅行は、400年前の朝鮮の役に際し、朝鮮から強制的に連行されてきて、九州各地に窯を開いた陶工たちの子孫を、最北の唐津から伊万里、有田、熊本を経て最南端の鹿児島まで訪ねて行くものでした。



朝鮮人陶工の子孫 中里紀元さん

上に挙げた各窯場を守っている子孫たちは、現在、初代から数えて13代から15代目までです。

もちろん、これらの人たちの一族は、300年以上も昔から日本人陶工として歳月を過ごしてきましたが、先祖が朝鮮から来た陶工であることは、誰も忘れていません。

それだけに、陶工の人たちは、ここ数年、日韓関係がギクシャクしている上に、韓国の朴槿恵政権が暗礁に乗りあげている状況を見て、心穏やかでない様子でした。

今回の旅行に参加した皆さんの感想文や俳句は、会報の6ページから掲載しますが、ここでは私が出会った3人の陶工さんの心情をお伝えしたいと思います。

まず、最初の方は、九州で一番古い焼物の歴史をもつ唐津の

陶工、中里紀元さんです。

中里さんは、元来は学校の先生ただけに朝鮮人陶工の渡来から、窯の構造、唐津焼の変遷まで大変詳しい人でした。その中里さんの言葉です。

「朝鮮の役の時、九州の各藩は朝鮮人陶工を金のなる木のように思って、多数連行して来るんです。いらい陶工たちは、殆ど監禁状態の中で商品価値のある焼物を開発させられました。良い作品が出来たら、それは全て藩が召し上げ、利益は藩のものに…。陶工たちは、唯、生かされているだけの存在だったのでしょ。

中に気骨のある陶工がいて、藩の方針に逆らおうものなら、直ちに見せしめの斬首刑にあいました。

皆さんは、日本人のDNAの中にこうした残忍な一面があったことを覚えておいてください！」

中里さんの話は、歴史の事実を踏まえているだけに説得力があり、一同 居住まいを正したものでした。

二人目の陶工は、有田で出会った金ヶ江省平さん(55歳)でした。金ヶ江さんの先祖は朝鮮の役の際、鍋島藩主、鍋島直茂によって有田に連行されてきた陶工、李参平です。

彼は、1616年に有田で質の良い陶石を発掘し、日本で初めて磁器の焼成に成功した人物として日本史に、その名が記録されています。

金ヶ江さんは、初代から数えて14代目という柔和な表情の方でしたが、やはり昨今の日本人、とりわけ若い世代の間に嫌韓ムードが拡散している状況が気がかりのようでした。

金ヶ江さんの言葉です。

「歴史上、日韓の間が、おかしかったのは秀吉の朝鮮出兵の時と日韓併合時代くらいだと思っていたんです。

ところが、先般、東京に出かけたら物凄いヘイトスピーチの嵐が吹きまくっていました。いつの間に日韓関係はこんなに、ひどくなったのかと驚いているんですよ！」と。

在日やニューカマーでもなく、先祖が400年前に日本人となっている現代の陶工でも、このところのヘイトスピーチの異常さには、心の中に波立つものがあるようでした。



金ヶ江省平さん



15代 沈寿官さん

つけましょう！韓国に良い友がいれば誰もが韓国に出かけます。すると、その友人も当然、日本にやってくる、日本をより深く理解する。それを続けていけば、やがては笑いのたえない隣人関係が生まれて来るのではないのでしょうか！？」

日韓の間で、400年間、悩み抜いてきた、陶工の知恵がこもった言葉だと胸うたれました。

三人目は、最後に訪ねた鹿児島の有名な陶工、15代目沈寿官さんです。沈寿官さんは、日韓の歩調がなかなか揃わない現状を前提に、こんな話をされていました。

「日韓の双方が、それぞれの立場で、決して許したくない、腹立たしいこと、それは、沢山あるでしょう。でも、今はもう、思い切って許そう！許容しよう！という想いをこめて、一步を踏み出して相手の手を取ることが必要な時期だとおもいますよ！それをしない限り、日本と韓国は、なかなか和解できないのではないのでしょうか！？」

次の言葉も強く記憶に残っています。

「とにかく相手の国の中に良い友だちを何人か見



ニュース

会名誉顧問 チョンファンギ 鄭煥麒さん 逝去



鄭煥麒名誉顧問

私たちの団体の創立から19年間、慈父のような温かい眼差しで、私たちを見守り続けていただいた会の名誉顧問 鄭煥麒さんが、去る10月25日に死去されました。享年93歳

葬儀は、10月28日に名古屋駅近くの斎場で行われました。

鄭煥麒さんは、韓国の慶尚南道の晋州市郊外で1924年に生まれ3歳の時、来日。

以後、名古屋周辺で骨身を削るような辛苦を重ねます。太平洋戦争の折にはB29の大空襲で妻子も妹も一瞬にして失うという悲劇にも遭うものの、やがて事業を成功させ『在日の中の在日』と言われた立志伝中の一人でした。

私たちの団体が1998年に発足した時、名古屋韓国学校の理事長だった鄭煥麒さんは「君たちの団体は、日韓市民のネットワークづくりをめざすと言う。目的が、良いから韓国学校を自由に使いなさい！」と言われました。それから10年余り、本当に私たちの団体は、韓国学校を無料で使わせてもらったのです。(今は、規定分 支払っています。)

鄭煥麒さんは、去年まで2月に行う会員の新春交流会には必ず出席され、こんな挨拶をされました。

「日韓市民ネットの良い所は、お金がない団体だということです。お金が少ないから、無駄使いはせず、大切に有効に使っている。だから、この団体は、永いこと続いているんです。

今後も、この調子でがんばって下さい！」と。

来る2月の交流会では、鄭煥麒さんの温顔に接することは叶いませんが、これまで頂いた言葉を忘れず、活動を継続できればと思っています。



交流会での鄭煥麒さん (2015年)



遠来陶工の里紀行 参加者感想文

日韓交流史フォーラム 九州の陶磁器の遺跡を訪ねて 長澤進

平成 28 年 11 月 23 日から 3 泊 4 日の日程で九州の地を一巡しました。30 名の一行は博多から唐津を経て名護屋城跡を見て北波多古窯の森の公園に入り岸岳の古窯を見学、中里太郎右衛門の陶房を訪ね古老から詳しく伊万里有田地方の陶磁器の話を拝聴、二日目は長年掘りつくされた巨大な泉山磁石場を訪ね天狗谷の古窯跡、日本最古の登り窯を訪ね陶山神社を拝謁、その後待望の李参平子孫金ヶ江省平の窯を見学、陶祖窯ギャラリーを巡りましたが流石この施設は古くて長い伝統を感じます。今泉今右衛門の工房を訪ね九州陶磁器文化会館に入ります。



バスの中では何時もの九州大学名誉教授の西谷先生、日比谷高校の武井先生の詳しい講義を聴きながらの快適なひと時です。唐人町を経て鏡園寺から佐賀に向かいます。今回のハイライトでもある八女古墳群の岩戸山の磐井の墓を見ます。実は 11 月 13 日に第四回東海歴史学シンポジウムが春日井市の市民会館で開催され、その折海のむなかた館長でもあられる西谷先生の磐井の乱の背景についてのご講演があり、それに深い興味を抱いていただけあり感動はひとしおでした。5 世紀に大和朝廷軍がこの九州の僻地に戦闘を交えたとは感慨無量です。江田船山古墳は磐井一族の集合墳墓の感がありました。博物館員の詳しい解説を聞いて熊本に泊まります。



三日目は地震の被害にあった熊本城、加藤神社を訪ね元祖高田焼上野窯を見て日奈久の温泉地を巡ります。八代湾の岸壁には西南戦争の幕府軍の侵攻地の記念碑が建てられて往時の激戦状態が忍ばれます。戦死した犬好きな西郷隆盛の興味あるエピソードは武井先生の解説で彼がディステンパに罹り皮膚病で睾丸が巨大に腫れていた話題でした。待望の世界的に著名な沈壽官氏の豪勢な工房を具に見学した後 15 代目の窯主の講話はユーモアに富み、とても一介の陶工とは思えない戦国武将の茶器を愛でる心情を鑑み、哲学的な含蓄のある内容で深い感銘を受けました。その夜は薩摩レストランで楽しい談合を全員で享受出来ました。



知覧特攻隊平和記念館

4 日目は知覧特攻隊平和記念館を訪ね武家屋敷を巡ります。当地は何度訪れても涙なしにはおれない悲しい想いが募ります。信頼できる熱心なガイドさんと運転手に恵まれ滅多に訪れることもない霧島神社まで参拝させて頂き充実した行程です。日ごろ体験できない陶磁器の蘊蓄を今回程丹念に勉強したことはありません。根回しをして多大な気配りをされた後藤会長の計らいで今回も快適な旅を会員一同満喫出来ました。来春は韓国の陶磁器の原点を訪ねる旅を企画しているそうです。

渡来の陶工 400 年の歴史紀行～九州縦断の 4 日間～に参加して 山田伸子

2011(平成 23)年の対馬・壱岐・名護屋城、昨年(2015)の九州北部紀行に続いて 3 回目の参加。そして、この感想文を書くのも 3 回目・・・20 年以上の西谷先生の(自称)岡崎ファンクラブ会員の代表として、ため息をつきながらパソコンの前にすわっている。

初日 11/23(水)は、唐津焼の器が美しい昼食後の散歩としては失礼ながら、秀吉朝鮮出兵時に、朝鮮から連行された朝鮮人陶工の子孫中里紀元さんから直接お話を伺えたのは、貴重な体験だった。品格を感じさせるお人柄だった。

その後、午前中唐津への車内で西谷先生から古代の新発見の遺跡等について説明を受けた東方に目をやると、三角の美しい形をした山が見えた。早速先生に伺ったら、「浮嶽でしょう」とのこと。山麓の谷口古墳は 4 世紀初頭の極初期の竪穴系横口式石室があると、確か車内で聞いた。岡崎には 5 世紀半ばの経ヶ峰 1 号墳という同種の石室を持つ古墳があるので、うれしい発見だった。



岸岳古窯跡

初日最後の岸岳古窯跡では、唐津焼の起源に関わる松浦党の盟主・波多氏に関わった日本最古の半地上割り竹式登り窯を林の中で、見学。「倭寇」と恐れられた松浦党が関係したのであれば、今後の研究の進展により、古唐津の出現時期は遡りそうな気がする。

2 日目 11/24(木)有田の内山、香蘭社の店等並んでいる狭い街道を走行中の車内から、1 階の庇屋根瓦に赤い顔料が見えるとの講師の指摘。2 階で絵付け職人さん達が工作中、余った顔料を手近な窓から捨てた結果だとか。街道の店の品ばかり眺めては、絶対に気付かないだろうし、今後、建て替えになったら、消滅してしまう職人さん達の活動の証を見ることができて、貴重な教えであった。

泉山磁石場は 15 年ほど前、5 月連休の陶器市に来たとき訪れたかった地。展望台となっている辺りから、はるかな黄色みを帯びた崖が見える所まで、江戸時代初期から営々と掘り進んで

いった先人達の後ろ姿の幻影を見たような気がした。

次に、予定外であったが、磁器草創期の中核生産地域であった、有田西部の小溝窯近くの「やんべた」地区、現在は住宅が建っている辺りの工房跡から古九谷の陶片が出土した地点まで案内していただいた。そして、もっと西方の唐津焼窯で最初の磁器が焼かれ、原料を求めここ外山から泉山のある内山へ陶工達は集められ、現在の有田の中心部となったと知った。



天狗谷古窯跡

李参平が泉山の磁石で磁器焼成に成功した天狗谷古窯跡では、4 基以上の登り窯跡が重なっているのを知った。李参平の子孫 14 代金ヶ江三兵衛さんにお目にかかれた。

九州陶磁文化館では、色絵大皿の深い緑や茶色は、私がこちらで九谷焼として目に焼き付いている物と同じだと実感した。古九谷は、有田説に納得させられた。

佐賀市中心部で昼食後、佐賀市唐人町の鏡圓寺で鍋島更紗の創始者、九山道清のお墓にお詣りした。鍋島直茂が朝鮮遠征より連れ帰った高麗人 13 人のうちの 1 人。漢方医の家柄の出であることから、染料となる植物に関連してのこと。唐人町の始祖、李宗欽一族の墓にも詣でた。朝鮮遠征より早く縁あって渡来し、朝鮮遠征に同行し、主君の命を受けて陶工を 6～8 人連れ帰ったという微妙な立場の方である。つらい気持ちがあったのではないか。

2 年ほど前、吉野ヶ里遺跡に娘婿が車で送ってくれた時、近くのクリークで釣りができると聞いていたが、佐賀市内の橋の多さや、田園地帯の多数の川等、武井先生のクリークに関する説明なしでは、忘れて通過してしまうところだった。

八女古墳群から朝鮮半島製と思われる金製垂飾付耳飾が出土することから、ヤマト王権とは違い独自の交流ルートを持っていた磐井の発展と敗れた後の行方など、想像・・・

2 日目の最後は、熊本県に入って、玉名郡和

水町の江田船山古墳の石室内の石棺のかなり近くまで入れて頂けた。壁面が赤く塗られているのがバッチリ。副葬品に多数の中国・朝鮮系の遺物が含まれていることが、如何にも交流の深さを表している。夕闇迫る中で田原坂を通過。武井先生の心霊スポットの話、タイムリー。

3日目 11/25(金)、ホテル近くの被災(2016年4/14以降)した熊本城、加藤神社を最初に訪問。惨状に心が潰れる思いだった。せめてもの助けになればと武井先生お勧めの朝鮮飴を購入。見かけはただの求肥かと思いきや、少し堅くなったのは、まさしく飴だった。美味しくて、深い味がした。長生飴から朝鮮飴となった経緯も、意味深い。

昨日の西日と今朝の朝日のためか、「噴煙を上げている阿蘇山中岳がバスの左側車窓から見える」と、バス座席前後の夏目さん・許さんと話した。

熊本平野を南下し、宇城市で九州自動車道へ入る前の道路に、「段差あり」の標識。武井先生の説明がなければ、あの地震の爪痕とは気が付かなかった。



12代上野浩之さん

次に、八代市日奈久の肥後高田焼(八代焼)上野窯に向かった。「開窯 1602 年旧細川家御用達」と看板にあり、文禄の役の際、加藤清正に従い渡来した陶工尊楷から 12 代上野浩之さんが、象嵌青磁技法の大変さ(手数がかかり、少量の生産しか出来ない)を説明してくださった。是非、続けて頂きたいと言う思いで、上品で可愛い桜と菊が一つずつ象嵌されている箸置きを 2 つ購入した。

昼食後は鹿児島県に入り、日置市東市来町美山の薩摩焼沈壽官窯で、慶長 3(1598)年初代沈当吉が、朝鮮国南原より薩摩に渡来して以来の沈家伝世品収蔵庫等を見学後、15 代沈壽官さんの見事なお話を 30 分伺った。教養深い方である。

日がかなり傾いて来たが、15 代さんの案内で、玉山神社に向かった。美山(旧称・苗代

川)に薩摩藩によって集住させられた陶工達が慶長 10(1605)年に檀君を祀る祠を建てたのが始まりという。開けた台地上の茶畑へ上る坂の途中、薩摩焼の増産と朝鮮人陶工の生活改善に尽くしたことから、死後も恩義を感じた苗代川地区の人たちが建てた調所広郷の招魂墓にも参った。

広やかな台地の西方にこんもりとした森のように見えたが、かなり急な階段を少し上った所にその神社はあった。手水鉢に島津の家紋があり、霧島神社遙拝所等、神社建築としては一般的ではあるが、本殿のご神体は、むかしこの土地に韓人達が漂着したとき、夜、はるか沖合から火光が飛んできてこの山の頂にとまり、数夜輝き続けたという祖神檀君。一行を護るために白頭山から飛来した火光が宿った岩をご神体としたという。本殿横の記念碑に刻んであった人名には、陶工の子孫かと思われる姓が見られた。

帰りに沖縄の亀甲墓にも似た沈家の墓所にお詣りした後、時間があれば、苗代川の陶工の祖先達が漂着したという東シナ海を見てみたかったが、残念だった。



15代沈壽官さんと会食

夕食はホテルの隣の居酒屋 2 階で 15 代さんも一緒に、賑やかだった。司馬遼太郎さんが、先代と玉山神社を歩いた様子や、渡来陶工の子孫の方々の苦労話等、「故郷忘じがたく候」(文春文庫 2016 年第 16 刷)に、「雲上在蒼天 平成 28 年晩秋吉日 陶工 14 代沈壽官」と素晴らしいサインのしてある本を購入。涙なしには読めないと、小林さんが、紹介してくださった。

4 日目最終日 11/26(土)午前中は、鹿児島にいた娘が「いぶスカ」と呼んでいた「指宿スカイライン」を南下して、知覧へ向かった。「これでもスカイライン？」とは松澤さん。無理もない。知覧特攻平和会館では、2 度と戦争を繰り返してはいけないとの思いを強くした。ミュージアム知覧では、特攻基地のジオラマにあった中世山城「知覧城」に注目。北方の知覧

武家屋敷群から、その位置を確かめた。しかし武家屋敷のガイドさんに尋ねてもあまりはつきりしなかった。地元の意識は薄いようだった。

萩、松坂、金沢、角館等、武家屋敷群を見ているが、石垣で屋敷が区切られたり、石敢當、屏風岩があるなど、趣が違った。知覧の港が江戸時代に琉球貿易の拠点であったことから、武家屋敷も琉球の影響を多く受けているという。

この4日間、天気がイマイチで眺望には恵まれなかったが、3回目ともなると、親しく話

しができる方が増えて、お喋りの花が咲いた。また朝日カルチャー、中日文化センター、古事記を読む会、春日井市での東海学シンポなどで、すでにお目に掛かっていた方々であったことから、興味の対象が同じ方達との会話は、心地よく得るものも多く、人に恵まれた旅だった。

4日間の武井先生、2日間の西谷先生、地元ならではの情報を教えてくださった嶋村先生、山本先生ありがとうございました。ジムで体を鍛えていらっしゃる添乗員の杉本さん、お疲れ様でした。

1. 「渡来の陶工400年の歴史紀行」に参加して 石割 三千雄

今回の旅行を私は大雑把に、次のようにまとめました。

① 伊万里、有田地域や沈寿官さんの陶磁器および陶祖 李参平窯を巡る旅。

今回の旅行では1日目・2日目・3日目と焼き物の名所を見学した。唐津・伊万里・有田・沈寿官窯と、何れも有名な陶磁器の産地です。だがこれ等の美術品を鑑賞する目を持たない小生にはまさに「宝の持ち腐れ」状態であった。しかし、沈寿官さんの言葉だったように記憶するが、「陶磁器は朝鮮の場合、青磁あるいは白磁のように区分されるが、日本ではその産地、あるいは絵付け・色彩によって区別されるという。」なるほど、と合点した次第。もし機会があれば、次の機会には見る目を養って訪れようと思う。

② 八女古墳群、岩戸山古墳、磐井の墓などを訪れる旅。

八女古墳群では磐井の墓を見ました。日本書紀の継体紀二十一(527)年に「新羅を狙う朝廷と、その狙いを妨げようとする磐井の勢力が火(肥)の国・豊の国で反乱を起こして戦った」との記載があります。その反乱軍の首謀者・磐井を祀ったと言われる墳丘を見学した。磐井の子、葛子は誅殺を恐れて糟屋屯倉を献上しました。糟屋は朝鮮交易の拠点になります。

③ 熊本地震 被災の痕、中でも熊本の街および熊本城を見舞う旅。

2016年4月14日21時26分、震度7の地震がこの地方を襲った。その被害の痕を色濃く残す熊本城を訪れた。筆者は4年ほど前に、一度この城を訪れていたその美しい姿が頭に残っている。そして今回、瓦を失った天守閣・崩れた石垣・塀等々、を観て実に痛ましい限りでした。元の姿を取り戻すには約20年と数百億円の費用を要すると言われていました。今回崩壊した石垣は創建時の石垣ではなく、後年に修改築した部分だと言います。加藤清正公の力(正確には築城の匠の力)やおそるべし、というところです。今後は美しい平成の修復を成し遂げてほしいと願っています。

④ 先の戦争で特別攻撃隊員として逝った若者の遺品を拝見する知覧への旅。

知覧展示館に展示されている兵隊の年齢と位は、その殆どが二十歳前後で、多くは尉官にとどまる。あたら若い命を祖国日本の為に賭けて自ら死におもむいたのである。(当然往路の燃料は持たない。)散華して昇格する、多くは少尉を贈られるが生前は伍長(三階級特進)である。先に有田では旧帝国海軍、連合艦隊司令長官 古賀峯一大将の生家をバスの車窓から見た、一方知覧では特攻で散華して逝った数多くの兵隊の生きざま示す遺品を見た。私たちは彼らの死を決して無駄にしてはならない。



被災した熊本城



古窯絵図



15代 沈寿官さん

登り窯

伊藤 義郎

ひっそりと登り窯跡冬ざる
小春日や仰ぐ天守に地震の傷
柿落葉沈壽官窯十五代
特攻の遺書に涙や冬帽子
石垣に石路の花咲く武家屋敷



冬うらら

佐藤 昭子



ブルーシート残るる熊本冬ざる
岩戸古墳音たて枯葉踏み行けり
桜島の煙灰かや霧の中
八女古墳千年銀杏黄葉どき
十五代沈氏の語り冬うらら

石路の花

高橋 孝子

ざわめきは磐井の声か石路の花
冷まじや唐津焼なる手榴弾
地震の跡しるき城垣浮寝鳥
冬の日を散らし白土の壺けずる
特攻の硬き蒲団や冬灯



石路の花

山本 悦子



芒生ふ一山削る陶石場
登り窯めぐりて払ふ草風
石路の花底にクルスの飯茶碗
冬ざるる特攻宿舍曇ぶとん
「隼」と特攻血書そぞら寒

山茶花

山本 玲子

冬の日を溢れむばかり特攻碑
冷まじや弾痕著き戦闘機
身に沁むや妹あての兵の遺書
山茶花や特攻兵の発ちし宿
陶土堀る崖に木の葉の降りやまず





알림 お知らせ

会創立 20 周年目を記念して『2000 年の日韓交流史を韓国で巡る』という歴史紀行を行います。

◆日程は、4 月 4 日から 9 日まで 5 泊 6 日です。

スケジュールと主な訪問地（地図）をお知らせします。

詳細な 1 日ごとの旅行資料は、過去、会の旅行に参加した皆さんにはお送りしていますが、ご希望の方は、

★後藤和晃（0587-56-6788）までご連絡ください。

◆旅行テーマ **2000 年の交流史を韓国で巡る**

～古代・戦国時代・現代の旅～



◆行程予定

1 日目 4 月 4 日（火）

金海空港到着 (KAL754 便 16:55 到着) 釜山市内観光(釜山泊)

2 日目 4 月 5 日（水）

釜山：甑山公園－金海：大成洞古墳群、国立金海博物館－晋州：晋州城、国立晋州博物館－泗川：泗川倭城－高靈：池山洞古墳群（慶州泊）

3 日目 4 月 6 日（木）

慶州：大陵園（天馬塚）、金冠塚、月城、瞻星台（車内見学）、雁鴨池（車内見学）、国立慶州博物館、塔谷磨崖石仏群、仏国寺、石窟庵－甘浦：文武王海中王陵、感恩寺、日本時代の村（大邱泊）

4 日目 4 月 7 日（金）

大邱：不老洞古墳群、寿城池 故 水崎林太郎追慕式－友鹿里－大田：公園墓地、弘道塚－会食（大田市民・国際交流関係者）（大田泊）

5 日目 4 月 8 日（土）

大田：旧知事官舎、旧鉄道鉄道官舎－益山：弥勒寺址－論山：灌燭寺（扶余泊）

6 日目 4 月 9 日（日）

扶余：扶蘇山城（車内見学）、定林寺址、王興寺址、国立扶余博物館－瑞山：磨崖仏－仁川国際空港 (KAL751 便 19:50 出発)

◆行程地図



旅行の骨組みを簡単に紹介しておきましょう。
旅行の2日目と3日目は、古代日本と極めて関係が深かったと言われる伽耶の遺跡に加え、古代新羅遺跡、さらに秀吉が唐入りの野望をかけた朝鮮の役の史跡を廻ります。
4日目と5日目は、日本が韓半島を合併した1910年から45年までに日本人が半島で記した足跡を大邱市、大田市で確かめると共に、現地の人々との交流の場を持ちます。さらに5日目の午後から6日目にかけては、伽耶が滅びた後、大和王朝と密接な関係を維持したという百済の史跡を廻り、交流の史跡の真実を探る予定です。
残るスペースで訪問する主要ポイントの写真を載せておきますので、ご参照ください。



晋州城跡
＜朝鮮の役 激戦地＞



池山洞古墳
＜伽耶時代の代表的古墳群＞



大邱水崎翁追慕祭
＜今年は池完成の90周年の節目＞



大田・戦前の日本人官舎群



益山・弥勒寺跡＜百済時代＞



扶蘇山城と落花岩＜百済時代＞

私たちのグループが、これまで国内外で行った交流史紀行を次のアドレスで、ご覧下さい。

<http://home.m00.itscom.net/nikkan/ryokou.html>

編集 応援（非会員）中川修介